

道徳科学習指導案

令和6年2月2日 2年 A組
 授業者 世田谷区立桜丘中学校
 教諭 大谷 秋音

- 1 主題名 「公正、公平な心」
 2 内容項目 C 公正、公平、社会正義
 3 教材名・出典 「闇の中の炎」(出典:文部科学省「中学校道徳 読み物資料集」)
 4 ねらい

主人公が葛藤しながら「ズルをしてはだめだ」と考える様子を通して、公正、公平な気持ちを大切にして社会で生きようとする道徳的実践意欲と態度を育てる。

5 指導過程

	学習活動	主な発問・予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入	1 コンクールについて確認する。	○コンクールってどんなものがあるか知っていますか。 ・作文や標語のコンクール ・絵画やイラストのコンクール ・合唱、吹奏楽のコンクール ・区展覧会など ○1つの作品をコンクールに出すか、出さないかで違いがあると思いますか	・コンクールが未発表でオリジナルのもので競う場であることなどを確認する。
展 開	2 教材「闇の中の炎」を読み、概要を捉える。 3 葛藤する理沙の思いを考える。 4 内なる規範を大切にして、社会に対して公正に行動することについて考える。	○お父さんに『有名な画家の絵を真似して描くのって悪いことじゃないよね』と聞いたのはなぜですか。 ・自分だけでは抱えきれない。 ・間違っていないと言ってほしい。 ・ズルではないと認めてほしい。 ◎理沙はどんな思いで、コンクールには間に合わないのに新しい絵を描き始めたのだろう。 ・自分のオリジナルの作品を完成させたいから。 ・やっぱりだめだと思った。 →理沙は何がだめだと思った？ ・このまま作品を仕上げていくことがだめ。 ・自分がだめだと思った状態で描くのがだめ。 →なぜだめなの？ ・他の人たちが、オリジナルで一生懸命考えたのに、自分がそれでもし勝ってしまったら公平ではないから。 ・自分が公正、公平だと思えない作品をコンクールに出すこと自体が恥ずかしいと思ったから。	・授業者が話の内容の確認をしながら、ベースとなる黒板に示していく。 ・隣同士で考える→全体に問う。 ・初めに理沙自身の迷いを確認した上で、他の人に間違っていないと言ってもらって安心したかった理沙の気持ちを考えさせる。 【協働的な学び】 ・ワークシート→交流→全体に問う。 ・本文に「だめだと思ったらだめ」という言葉があるので、その言葉から一体何がだめなのかということを考えていく。ただ真似することをだめなのだと思ったのではなく、自分が真似だ、良くないのだと思った状態で続けることが良くないということを考えさせたい。 【協働的な学び】 ・さらに、なぜだめだと思うのかを考えることで、コンクールに臨む姿勢として公正さや公平さを大切にしたいと思っていることを確認する。 また、秩序ある安定した社会の実現のためには、公正、公平な態度であるべきだということに気付かせたい。 【個別最適な学び】
終 末	5 3色振り返しを行い、本時の学習を振り返る。	○理沙の葛藤や態度を見て、あなたならどう思いますか。	・ロイロノート→ワークシート→全体で共有する。 ・提出された意見を全体共有にして読み合う。そこから気になる意見を書き出しそれに対する意見や考えを共有する。 【個別最適な学び】

6 評価

- ① 社会に対して公正、公平であることについて、多面的・多角的に考えようとしていた。
 ② 社会に対して公正、公平であることについて自分自身との関わりの中で深めようとしていた。

■主題設定の理由

公正とは社会生活の中で守るべき正しい道としての公德を大切にすることである。またそのように公德を大切にすることは、社会での公平さや自分自身を大切にすることにもつながっていく。

今回の教材では、コンクールに挑もうとする主人公が、一度は既存の絵画を模して作品作りに取り組もうとする。しかし、自分の中の違和感と向き合い、父親の助言を得ながらも葛藤する。最後にはコンクールに間に合う、間に合わないに関わらず、ずるいことをしないで自分自身の作品を作ろうとする主人公の姿を通して、社会における公正さや公平さを大切にすることが内なる規範を支えることについて考えさせたい。

■指導の工夫

【導入の工夫】

コンクールという場においては、未発表でオリジナルなものが求められていること、1つの作品をコンクールに出す際にはさまざまな規定やチェックが必要であり、学校の代表として出す場合には責任などが伴うことも確認する。

また、コンクールは、作品を通じて社会と関わる場であることも考えられるようにする。

【展開の工夫】

展開においては、板書を活用しながら理沙の心の動きを考えていく。理沙の「安心したい」「間違っていないと言ってほしい」という思いは生徒も共感ができる部分ではあるが、社会の一員（今回の場合はコンクールの参加者）としては自分本位なものである。

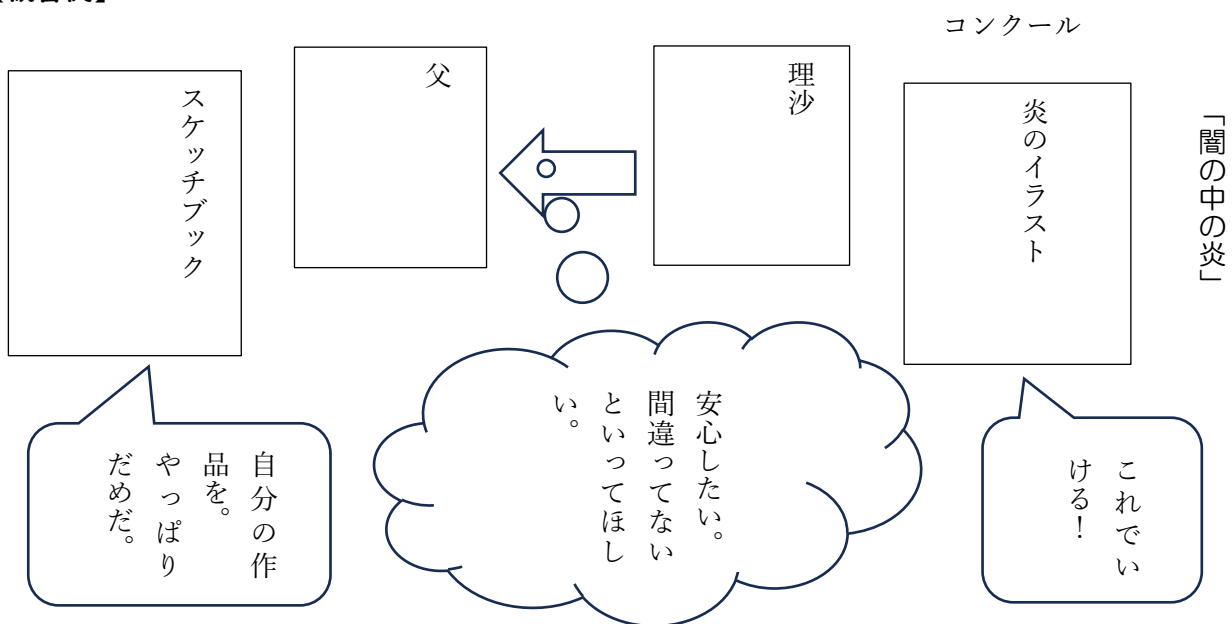
中心発問で、理沙の中にある「だめだと思ったらだめだ」という思いを、なぜダメだと思ったのかという視点で考えることで、社会において、自分だけが得をしたり、楽をしたり、いい思いをしようしたり（そういうつもりはなくても）することは不公正、不公平だということ、ズルをしてまで榮譽を得たいという弱く醜い心についても考えていく。

補助発問として、作品をそのまま提出してしまった後のことも考えさせたい。

【ICTの活用工夫】

今回の研究授業では、「3色振り返り」という取り組みを行う。これは、3色に分割された振り返りカードのことで、「よく分からなかったこと」「自分と関連すると思ったこと」「思いや考えが広がったこと」と分かれている。これにより、生徒は本時の学習を整理しながら振り返ることができ、教員も評価や授業改善に役立てることができる。

【板書例】



道徳科学習指導案

令和6年2月2日 2年B組

授業者 多摩市立鶴牧中学校
主任教諭 鈴木 美帆

- 1 主題名 「規律ある安定した社会の実現」
 2 内容項目 C 遵法精神、公德心
 3 教材名・出典 「闇の中の炎」(出典:文部科学省「中学校道徳 読み物資料集」)
 4 ねらい

「私」を大切にすることと「公」を大切にすることの関係について考えを深めることを通して、法やきまりを自律的に捉え、主体的に判断しようとする道徳的実践意欲と態度を育む。

5 指導過程

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1 著作権について、現在の自身の規範意識を自覚する。	○「有名な画家の作品を基にし、自分の作品を描く」ことについて、どう思いますか。 ・絵の練習にはなと思う。 ・著作権に違反するから、ダメだと思う。 ・著作権って何のためにあるんだろう。 ・参考にする「程度」によるんじゃないかな。 ・「程度」って、どこまでならいいんだろう。	・「趣味として楽しむため」と「コンクールに出品するため」のように、目的に合わせて考え、著作権に関する自身の意識を、生徒が再認識できるようにする。
展開	2 教材「闇の中の炎」を読み、概要を理解する。 3 教材について、理沙の葛藤している気持ちについて、考えを深める。	○「筆をもつ理沙の手が止まりがちになっていた」のはどうしてだろう。 ・真似したことへの罪悪感があったから。 ・実際に見ていない場面を描けないと思ったから。 ・自分の行いが正しいのか、迷いがあったから。 ◎締切に間に合わないだろう中で、夢中で鉛筆を走らせたのはなぜでしょう。 ・後ろめたい気持ちを抱えたまま、絵を描くのが嫌になったから。→(問い返し)何に対する後ろめたい気持ち?(著作権の侵害)→著作権はなぜ必要なのかな。(作者の権利を守るため)→もし、みんなが同じ作品しか作らなかったら、社会はどうなるかな。 ・このまま作品を仕上げたら、後悔すると思ったから。→(問い返し)どうして後悔するの? ・先生や友達の期待を裏切りたくなかったから。→(問い返し)そのまま完成させたら、周りはがっかりするってこと?(はい)→どうしてがっかりするのかな?	・教材「闇の中の炎」を範読する。全体に問いかけながら、概要を確認する。 ・中心的な発問は、個人の考えをロイロノートに入力し、共有する。 共有①グループで話し合う。 【協働的な学び】 共有②共有ノートを班ごとに作成しておく。生徒は自分の考えを、共有ノートに送る。生徒は共有ノートを自由に閲覧し、様々な考えに触れる。 【個別最適な学び】 【協働的な学び】 共有③授業者が選んだ意見を全体で共有する。 【協働的な学び】
終末	4 本時の学習を振り返り、授業の感想をワークシートに書く。	・理沙のように、自分で気付くことが大切だと思った。ルールやマナーを守ること、一人一人の権利が尊重されると感じた。 など	・理沙のように、一人一人が内なる規範をもつことで、安定した社会の実現につながることを押さえる。

6 評価

- ① 法やきまりを自律的に捉え、主体的な判断に基づいて行動するために必要なことを、多面的・多角的に考え、自身の考えを深めようとしていた。
 ② 理沙の葛藤する気持ちに寄り添いながらも、法やきまりのもつ意義を理解し、自身の問題として考えようとしていた。

■主題設定の理由

ねらいとする道徳的価値について

「法やきまり」は、私たちの社会に秩序を与えるだけでなく、自分自身や他者の生活や権利を守るためにある。「私」と「私」の利益がぶつかり合って、集団のまとまりがなくなってしまうと、結局、個々の願いが実現できないことがある。一人一人が社会の構成員であることの意識をもちながら、「私」を大切にすること、「公」を大切にすることの関係について、考えを深めさせていくことが重要となる。しかし、「法やきまり」について、「ルールだから守る」と他律的に捉えている生徒は多い。教材を通して、法やきまりを自律的に捉え、主体的な判断に基づいて行動しようとする態度を育みたい。

教材「闇の中の炎」について

登場人物の理沙は、自身の行いが「著作権を侵害しているのではないか」と葛藤する。「あの作品は版画だったし、私のは油絵。タッチも構図も違う。全然印象が違う。」と自分に言い聞かす場面もある。実際、どこまで「真似している」のかは読者には分からない。もしかしたら、理沙の言うとおり、「全然印象が違う」のかもしれない。しかし、理沙が著作権を自律的に捉え、「やり直す」と決断した。その理沙の心情を想像しながら、法やきまりのもつ意義について、考えを深められるようにする。

■指導の工夫

【個別最適な学びの視点】

学習方法を
生徒が選択する

何を使うか

自分の考えをまとめる際、生徒はやり方を自由に選ぶことができる。以下は例である。

・紙にメモする。・タブレット上でタイピングする、あるいは手書きする。



誰と学ぶか

共有機能(ロイロノート)を活用する際、事前に「共有すること」を生徒に伝える。そして、名前が見える状態で、全員の考えを共有する。生徒は誰の考えを知りたいか、自由に選択し、多くの考えに触れることができる。

【協働的な学びの視点】

異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出す

話し合い活動や、一人1台の学習者用端末の活用を通して、生徒は多くの意見に触れる。端末で本時の学習を振り返ることで、自身の考えを広げたり、深めたりできたことを実感できるようにする。

【ICTとワークシートの使い分け】

ICT活用の利点

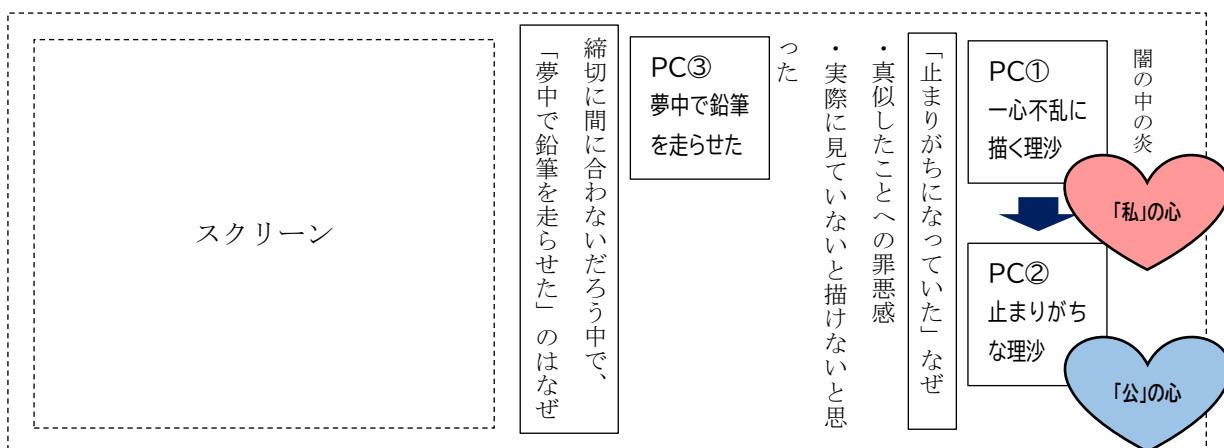
- ・紙に「書くこと」が苦手な生徒の考えを、教員が見取ることができる。
- ・多くの人の考えを瞬時に共有することができる。

ワークシートに「書く」利点

- ・自身の考えを整理しやすい。
- ・ポートフォリオとして学習を積み重ね、見返しやすい。



■板書計画



道徳科学習指導案

令和6年2月2日 2年 C 組
 授業者 八王子市立宮上中学校
 主幹教諭 海老澤 宏

1 主題名 「誠実に実行するために…」

2 内容項目 A 自主、自律、自由と責任

3 教材名・出典 「闇の中の炎」(出典;文部科学省「中学校道徳 読み物資料集」)

4 ねらい

主人公の心の変化について考えることを通して、誠実に実行するために必要な道徳的判断力を養う。

5 指導過程

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1 タイトルから内容を想像し説明を聞く。	○「闇の中の炎」とどんな話だと思うか。 ・暗い話 ・情熱的な話	・あらすじを説明する。
展開	2 「闇の中の炎」を読み、主人公の考えを追うことを通して、誠実に実行することの難しさや大切さについての考えを深める。	○どこが印象に残っているか。 ・間に合いそうもないのに2枚目を書き始めるところ。 ◎「もうメ切には間に合わないだろう。でも…」どうしてここから夢中になれたのか。 ・自分を変えて頑張りたいと思ったから。 ・納得いくものを描きたいと思ったから。 ・自分の描きたいものが分かったから。 ・「自分がダメだと思ったらダメ」と思ったから。 ○＜問い返し;生徒の意見を受けて＞ 「自分がダメだと思ったらダメ」それはどういう「自分」か。 ・他人に左右されない自分 ・気づかされた自分 ・納得するまで頑張れる自分 ・モヤモヤではイヤな自分 ・自分の気持ちに素直な自分 ・理想を追うことをあきらめない自分 ○＜問い返し;生徒の意見を受けて＞ そういう「自分」がいると何がいいのか。 どうしていいのか。 ・最終的に納得できる。 ・自分に素直に生きられる。 ・自分に向き合える。 ・自分らしく生きられる。 ・理想像に近づく。 ・周りに振り回されない自分をもてるようになる。 ・強い自分になれる。 ・楽しく生きられる。	・教材を範読する。 ・あらすじを板書し、中心場面を明示する。 ・机をコの字にし、グループ毎に全員指名する。 【協働的な学び】 ＜補助発問＞ 「きっかけは何か。」 「『自分がダメだと思ったらダメ』とはどういうことか。」「何がダメなのか。」 ・「自分」を話題にする。 ＜その他の問い返し例＞ 「そういう『自分』がいるのはどういう人だろう。」「いい絵さえ描ければそれでいいのではないのか。」「それってどういう生き方なのだろう。」「それくらいで夢中になれるものだろうか。」「間に合わなかったらどうするのか。」 【個別最適な学び】 「夢中になった理沙は何を一番大切に思っているのだろう。」
終末	3 授業を振り返り、考えたことをまとめる。	・自分を裏切らず本当にいいと思うものを追いかけていきたい。 ・周りに振り回されず自分らしく生きることを大切にしたい。	・机をもとに戻す。 ・説話、ワークシート記入、書けない生徒への配慮をする。

6 評価

- ① 誠実に実行するための判断力について、道徳的諸価値の理解を基に自己を見つめ物事を多面的・多角的に考えた発言や記述が見られた。
- ② 誠実に実行するための判断力について、考えを深めた発言や記述が見られた。

■主題設定の理由

本教材は主人公理沙の「ああ、だめだ」に始まる。どうしたかったのか。さんざん迷いどう決断したのか。他の絵を参考に描こうとしたがとうとう自分の心がそれを許さなかったのはなぜか。

父親は目的によっては他の人の絵の真似することは問題ないと言った。しかし最後には自分で「あの作品を完成することはできない」と判断した。

理沙が何をダメだと思ったか明確ではない。公德に関するものか自分の創造性に関するものか苦し紛れについた嘘についてのものかそれ以外に何かあるのか判然としない。ただ明らかに父親の助言には重みがある。「自分がダメだと思ったらダメ」この言葉を理沙は心の中で繰り返し、決断する。

理沙の選択肢に出す出さないはない。一貫して出そうとしている。ただ、どう出すかが問題。理沙はなぜ新しい絵に取り組むことにしたのか。理沙の思い浮かべたよりよい自分とは何か。どういう価値観の変化があったのか。自分を見つめ自分を振り返りよりよい生き方を目指す自分、見つめる自分と見つめられる自分、その二つの自分とはどういうものか。変化する理沙の内面を生徒と探求し、自分を誠実にみつめ自分で判断し実行することの大切さについて考えることを通して、道徳的判断力をはぐくみたいと願い、本主題を設定した。

■指導の工夫

「『もう締切には間に合わないだろう。でも…。』理沙は…夢中で鉛筆を走らせていった。」それまでの遅々として筆を運べなかった姿が嘘のように理沙は一心不乱に作品に取り組む。明らかに理沙が変化するこの場面を中心場面とする。理沙の内面の探求に時間を割くため、導入であらすじを説明し、範読後再度生徒の発言も活用して話の筋の確認をしたらすぐに中心発問に入る。その後は生徒の意見を整理し問い返し（個別最適な学び）ながら主題に迫る。

話し合いの活性化のため、中心発問からは机をコの字に配置して4人グループをつくり、グループ毎に発言させながら全員を指名する。教材との対話、教師との対話、子ども同士の対話を図り、みんなで広げ深めることを目指す（協働的な学び）。

終末には自分との対話を促すため机を元の配置に戻し、自分一人で授業を振り返らせる。書くのが苦手な生徒に配慮した説話をを行った上で、本時に感じたこと考えたことをワークシートにまとめさせる（個別最適な学び）。適宜発表させる。

問い返しは、個々の意見をその場で問い返すものと、出された意見をひとまとめにして全体を段階的に深めるため生徒全員へ問い返すものを使い分ける。理沙の変化について深めていけば父親の助言は話題に上ると予想し、「自分」をキーワードに、考えを広げる、より詳しく聞く、主題に向ける、主題を深めることをねらう。

■板書計画または ICT 機器活用について

